
誘う鈴

梶浦絶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘う鈴

【著者名】

梶浦絶

N7702Y

【あらすじ】

疲れていたラフィは鈴の音を聞く。

あの晩との出合

疲れていたので空耳が聞こえたのかと思つた。

チリン、と控えめに鳴つて、それだけで終つた。

知らない部屋だったが息苦しさに耐えられず、窓を開けようとした。

窓辺に立ち寄つたところでまた聞いた。

チリン、チリンと。一度。

戻つてくるとまるで夢から覚めた気分だつた。

ラフィは灰色の宙に浮いたキューブの家に住んでいる。
奥行きが三メートル、横が一メートルと狭い。扉から一番はなれた位置にそつけない窓がある。

正方形で、縦二メートル横一メートルの壁の中央をくり抜いている窓。

窓は大きい。

いつそのこと壁一面を窓にすれば良かつたのに、と思ひませど。

そしてその窓は開けることが出来ない。

キューブから五メートルも離れていない場所を列車が走っているからだ。

空気が悪く、騒音も激しい。

ラフィは外出するときにはいつもイヤホンを付ける。

耳を塞いで音楽を聴いく。そのほうが騒音を聞くより耳に優しいからだ。

黄金色の鳥、ミルル（前書き）

隣人アキトとラフィーの会話の最中、鳥のミルルが迎えに来る。

黄金色の鳥、ミルル

家のドアを開け、外に出る。

俯いていたラフィイは気がつかなかつた。左隣の住人が同じタイミングでドアを開けたことに。

耳にはイヤホンを付けている。音も聞こえない。

「ああ、あんた、目が金色じゃないか。よそ者か」

そう呼びかけたのは腰まで届く黒髪を一つに結んだ男だつた。ラフィイと並ぶと二十センチほど背が高い。キューブに住むには不向きな鍛えられた体をしていた。

「・・・・・シカトかよ」

気がつかないラフィイがイヤホンをしていることに気がついて、男は無造作にラフィイに向かつて手を伸ばし、イヤホンを取る。

そこで初めて外の轟音を聞いたラフィイは、思わず耳を塞ぐ。

そしてさつき自分に向かつて伸びた手の持ち主を見上げる。

透き通るような白い肌は病的にさえ見える。よそ者と言われる理由になつた金色の目と、それを縁取る長い睫毛は不審げに男を見上げる。

そして不審は不安に変わる。

「・・・・・なんですか」

小さい声はからうじて聞き取れるほどだつた。男はラフィイを少女かと思つた。背丈は百六十ほど、瘦せていて、よそ者らしく抜群に抜きん出た美しさだ。

「挨拶だよ。俺はアキト、よろしく。あんたは?」

アキトはここに来てひと月になるが、薄いキューブの壁から隣の物音が一切聞こえてこないので人が住んでいないと思つていたのだ。思いがけず隣人を発見して、つい声をかけた。

しかし、何ですか、と問われても答えようがなかつたので、つい

『挨拶』と言つた。

「僕は、ラフイ」

「僕？」

「男ですよ」

よく女と間違えられるラフイは淡々と答えた。そして時計を見る。今日はやつと雇われたアルバイトの一田田で、まさか遅刻するわけにもいかなかつた。

「すみません、急ぐんで」

「急ぐなら送るうか？ 僕のミルルは速いぞ」

「間に合つので大丈夫です」

アキトの言葉が終る前にかぶせるようにして、ラフイは断る。今日初めて会つた人に送つてもらひつ理由なんてなかつた。大体嫌いなのだ、人と接することが。

「あ、そう」

気にする風ではなく、アキトは答える。そして胸元から細い銀の鎖を引っ張り出す。

その先にはマツチ棒くらいの大きさの笛がぶら下がつている。思わず興味を持つて、ラフイはそれをじっと見る。

キューブは宙に浮いているので、風も強い。

自然の風と、列車や飛行機が通るたびに吹き付けられる風と。慣れてしまえばそれまでだつた。

アキトが皮ひもで結んでいる黒髪が風に流れる様子を、ラフイは見つめる。

さらさらと指どおりが良さそうで、触つてみたい。

ラフイは自分の肩に付かない程度の金髪になんとなく触れる。

紛らわしいから切つたのに、今日も女の子に間違われてしまつた。

「寝てるからさ、鳥笛で来なかつたりするんだ」

笑つてラフイを見てから、笛を吹く。

気になつてじつとこちらを見ている様子は、少女に見えようが少年に見えようが幼い子供そのもので単純に可愛らしかつた。

前方からバサツバサツという音と共に黄金色の羽の鳥が近づいて

くへ。

その姿はまるみる大きくなり、ぶつかる、と思わずラフイは身をすくめ後ろに下がる。

「起きてるわよ！ 起きてあんたがそつちの女の子をナンパしているところから、ずっと聞いてたわ！」

「おい、誤解だよ。ナンパじゃないし女の子じゃないんだよ」

「私、気を使って散歩してたの。でもいい加減嫌になっちゃう。アキトはついに幼い男の子にまで手を出すようになったのね・・・」

「ミルル、勘弁してくれよ～、あ、ラフイ。誤解だから。この鳥の誤解だからな」

ラフイは暫く全長三メートルはありそうな鳥の顔を見ていたが、話の内容からそつとアキトから離れる。

「鳥って言わないで！」

「だつて鳥だろ！？」

一人と一匹の言い争いを聞きながら、ラフイそつとその場を去る。

「ラフイ、信じるなよ！..」

まるで古い仲のように遠ざかるラフイに声をかける。

ラフイは足早に立ち去りながら、ミルルと呼ばれた鳥の、黄金色の羽と瞳を思い出していた。

おそれこだ、と思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7702y/>

誘う鈴

2011年11月24日09時45分発行